

歩み少し変えて

声が開きたい
Voice
えひめ

ひと月の県人

若者たちの中で広がる
働き方がある。日本各地
の農漁業などのアルバイ
トに従事し、昔からの出
稼ぎとはおもむきが少し
違つ。北海道から沖縄ま
で産地を旅する人、新た
な出会いを求める人、日
常をいっとき離れ、田舎
暮らしを楽しむ人という
いる。八幡浜市真穴地区
は彼らが「漂泊」する土
地の一つ。ミカンアルバ
イターとして農家を支え
る。

市中心部から車で約20
分。宇和海沿いにくねく
ね続く細い国道をたどる



収穫も終盤にさしかか
った冬の晩。この日の労
働を終えたアルバイター
がいろりを囲んで談笑す

ミカンの里 助っ人集う

る。真っ赤な皮がパチン
とはせて、ぬくもりがじ
んと伝わる。家の主が畑
(かん)をした酒を酌み
交わし、つまみはシラス
とギョウザ。夜はだいたい
冷え込んできた。

で、アルバイターは「お
おちゃん」「お母ちゃん
」と慕い、農家は「うちの
子」と呼ぶ。旅を続ける
暮らしに区切りを付けた
者でさえ、懐かしい顔に
会つために毎年帰ってくる
。こうして彼らはひと
月の県人そして「家族」
となる。

「いろんなところを訪
ねて歩く生活が楽しい。
あつぱかんと語る顔は
たかましく、自信に満ち
ている。『定住』と『安
定』。当たり前に映る社
会の座標軸を、ちょっと
ずらして暮らす。

『都会の若者にミカン
をPRし、あわよくは地
元に移り住んでもらおう
。そんな思惑も絡んで
始まった真穴のミカンア
ルバイター事業は16年続
き、来訪者は延べ千人を
超えた。彼らは今や欠か
せぬ存在でもある。

格差、競争、ストレス
。社会の頭に付く言葉
はどれも重く、卑しい。
刃りを見渡せば、限界集
落や耕作放棄地が広が
り、商店街のさわめき
が消えていく。愛媛の展望
はなかなか開けない。

ならば足元を見てみよ
う。日々の歩調を少し変
えて、みれば景色も違って
映り、気付きもことがある
かもしれない。

シリーズ「Voice
えひめ」。同時代のひと
びとの声に耳を澄ませ、
生きるヒントを探る。
植木孝博(2)、宮京太郎
森田康裕、高橋舞)

■第2部37面に続く



1日の作業を終え、いろりを囲んでちょっと一杯。真穴のミカンアルバイターと農家の笑顔がはじける—2009年12月中旬、八幡浜市真穴地区